

# 永嘉大師證道歌 一

君見きみみずや、

ぜつがくむい かんどうにん

絶學無爲の閑道人。

もうぞう のぞ しん もと

妄想を除かず、眞を求めず、

むみょう じっしょう そくぶっしょう

無明の實性、即佛性、

げんげ かうしん そくほっしん

幻化の空身、即法身。

君は会ったことないか、もはや学ぶこともなく為すべきこともない閑人に。  
妄想を除こうともせず、眞実をも求めない。(言葉によって)明らかにならない  
この現実こそが佛の正体であるといい、幻のように変化するこの身こそが佛の  
身体であるという。

永嘉大師

永嘉玄覺大師（一七二三）。六祖慧能に参じる。

# 永嘉大師證道歌 二

ほっしんかくりよう むいちもつ  
法身覺了すれば無一物、

ほんげんじしょうてんしんぶつ

本源自性天真佛。

ごおん ふうん くうこらい

五陰の浮雲は空去來、

さんどく すいほう きよしゅつぽつ

三毒の水泡は虚出沒。

佛の身を悟り切ってみれば私たちが元来所有しているものは何もないということに気付く。もともとの自分自身のありようこそが本来の佛なのである。しかし（悟ったからといって）この世界や心の働きが無くなったわけではなく浮雲のように行ったり来たりしているし、貪瞋痴の煩惱も水の泡のごとく出沒している。

法身

佛の身体

自性

自分自身のありよう

天真

本来

五陰

五蘊。色（現象の世界）受（感覚、知覚の世界）

想（概念の世界）行（意思の世界）

識（心の主体としての六識）

悟りの障害となる三つの煩惱。

貪瞋痴（とんじんち・むさぼり・怒り・無知）

三毒

# 永嘉大師證道歌 三

じつそう しょう じんぼうな  
實相を證すれば人法無し、

せつな めつきやく あび ごう

刹那に滅却す、阿鼻の業。

も もうご もっ しゅじよう まどは

若し妄語を將て衆生を誑さば、

みずか ぼつぜつ まね じんしゃごう

自ら拔舌を招くこと塵沙劫ならん。

(悟って) 本当のことを証明してみればそこには人間界の取決めなどは何も無い。無間地獄に墮ちるような所業も一瞬のうちに消え去ってしまった。しかしでたらめなことを言って人々を惑わすようならば、みずからずっと(閻魔さまに)舌をぬかれてしまうだろう。

人法 人の世の取決め。

刹那 短い時間の単位。

阿鼻 無間地獄。極苦最悪の地獄。

業 報いを生じる元となる行為。身口意、善悪などに分類される。

塵沙劫 ちりとすなのように多い劫(長い時間の単位)。無限の長時間。

# 永嘉大師證道歌 四

頓とんに如來禪にらいぜんを覺了かくりようすれば、

ろくどまんぎようたいちゆう まどか

六度萬行體中ろくどまんぎようたいちゆうに圓まどかなり。

夢裡むりめいめい明明ろくしゆあとして六趣ろくしゆあ有り、

覺さめて後空空のちくうくうとして大千だいせんも無なし。

一瞬さに如來の禪を悟のちくうくうつてみれば、六つの智慧だいせんによる一切の善行なが体の中に満ち満ちていた。妄想の世界には明かに天国や地獄があるだろう、しかし妄想から覚めてみるとそこには何もなくこの世界さえないのだ。

六度 六波羅蜜。布施、持戒、忍辱、精進、静慮、智慧。

萬行 一切の善行。

夢裡 妄想の世界。

六趣 衆生の輪廻する世界。天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄。

大千 三千大千世界。この世の様々な世界。

# 永嘉大師證道歌 五

罪福も無く損益も無し、

ざいふく な せんえき な

寂滅性中 問覓すること莫れ。

なか

ひらい じんきよういま かつ ま

比來の塵鏡 未だ曾て磨さず、

こんにちふんみよう すべか ほうしやく

今日分明に須らく剖析すべし。

ここには罪とか福とかもなく、損や得もない。いまここそが悟りの境地なのだから何かを他に探し求めてはならない。近ごろ塵が積もってしまった鏡もいまだかつて磨いたことなどはない。今日そんな鏡などはきれいに断ち割ってしまえ。

寂滅性中

寂滅は悟りの境地のこと。

問覓

探し求めること。

比來

近ごろ。

塵鏡

塵の積もった鏡。神秀上座は塵が着かないよう心の鏡を磨いた。

六祖は塵など積もるところはないと言った。

分明

明かに。

剖析

断ち割る。

# 永嘉大師證道歌 六

誰たれか無念むねん、誰たれか無生むじょう、

若もし實じつに無生むじょうならば不生ふじょうも無なし。

機關きかん木人ぼくじんを喚取かんしゅして問とへ、

佛ほとけを求め功もとを施こうさば早晚ほどこ成いつかじょうぜん。

誰が心を動じないというのだろうか、誰が世の中の生滅の相から離れているというのだろうか。もしほんとうに離れているならば世の中の生滅の相を敢えて否定することもないだろう。佛道の関門については木の人形でも呼び出して問うたらよい。佛を求め修行に功夫をしていれば遅かれ早かれ道は成ずるものなのである。

無念 念は対象に対して心を動かすこと。無は所有しないこと。

無生 生は世間生滅の相。世間生滅の相を所有しない。

不生 世間生滅の相を否定する。

機關 学人を導くために機にに応じて設けた関門。

木人 木で出来た人形。

# 永嘉大師證道歌 七

四大を放つて把捉すること莫れ、  
しだい はな はそく なか

じやくめつしようちゆうしたがいんたくおんたく

寂滅性中 随つて飲啄せよ。

しよぎよう むじよう いっさいくう

諸行は無常にして一切空なり、

すなわ こ によらい だいえんがく

即ち是れ如來の大圓覺。

あらゆるものを駆使して捉えようとしてはならない。悟りの境地のまっただなかにいるのだからそこで飲み食いしていけばよい。すべてのことに磐石のこととはないしもともと意味などないのだ。しかしそこそが釈尊の悟りなのである。

四大 四つの元素。地水火風。全身。

把捉 捉える。

寂滅性中 寂滅は悟りの境地のこと。

飲啄 鳥が水を飲み、餌を啄ばむ。人間の飲み食いの生活。

如來 悟りを開いた者。釈尊。

圓覺 悟り。

# 永嘉大師證道歌 八

けつじょう せつ しんそう ひょう  
決定の説は眞僧を表す、

ひと うけが じょう まか ちよう  
人あり肯はずんば情に任せて懲せよ。

じき こんげん き ほとけ いん ところ  
直に根源を截るは佛の印する所、

は っ えだ たず われあた  
葉を摘み枝を尋ぬるは我能はず。

(悟りへ) 決着する佛の説得は本当の自分自身を明らかにする。どうしても納得しない人がいたら感情に任せて懲らしめてやりなさい。直接に(私の)根源を捨て去ることは諸佛の証明してきたところである。(私の根源を截らないで) 枝葉末節を摘み取ったり求めたりしてもどうにもならないのである。

決定 決着すること。悟り。  
眞僧 本来の自己。

# 永嘉大師證道歌 九

まにじゆひとし  
摩尼珠人識らず、

によらいぞうり した しゆうとく  
如來藏裡に親しく収得す。

ろつばん しんようくうふくう  
六般の神用空不空、

いつか えんこうしきひしき  
一顆の圓光色非色。

宝の珠のことを人は知らない。しかし人はふところのうちに親しく抱えてい  
る。(悟りを開いた人の)何ごとにも左右されない目や耳のはたらきもあるよう  
なないような。(悟りを開いた人の)すべてを照らす後光もあるんだかないんだ  
か。

摩尼珠 宝珠。本来の自己。

六般の神用 眼耳鼻舌身意が色声香味触法を把握するのになにもものにも妨げ  
られず、汚されないで自由自在に働くこと。

# 永嘉大師證道歌 十

五眼を淨ごげん きようし五力を得ごりき う、

唯ただ證しょうして乃すなはち知しる測はかるべきこと難かたし。

鏡裡きょうりに形かたちを看みる見みること難かたからず、

水すいちゆう中に月つきを捉とらふ争いかでか拈ねんとく得とくせん。

菩薩の眼をもつて欺、怠、瞋、恨、怨を克服する力を得るのだが、悟ってか  
ら知ったのは悟っていないものには（その眼がどういふものか）推し測ること  
が難しいということだ。鏡の中に形を見ることは難しくないのだが、水に映つ  
た月を捉えることはできないのである。

## 五眼

肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼。菩薩は肉眼で衆生の苦患を見、  
天眼を得て衆生の身心の苦を見、慧眼を得て衆生の身心の種々  
不同なるを見、法眼を得て衆生を導き、佛眼を生じ佛となる。

## 五力

信、精進、念、定、智慧の力によって欺、怠、瞋、恨、怨を克  
服する。

# 永嘉大師證道歌 十一

つね ひと ゆ つね ひと ほ  
常に獨り行き常に獨り歩す、

たつしやおな あそ ねはん みち  
達者同じく遊ぶ涅槃の路。

しら ふ しんきよ ふうおのずか たか  
調べ古り神清うして風自ら高し、

かたちかじ ほねかと ひとかえり  
貌頷け骨剛うして人顧みず。

常にひとりで行き、ひとりで歩むのだ。佛道に達したものはみな同じく悟りの境地に遊んでいる。言うことは古いことだが、心は清く風情はおのずと高貴である。だが容貌はやつれて骨がごつごつとしていて誰も人はかえりみない。

涅槃 語源のニルヴァーナは吹き消す意。貪瞋痴の三毒煩惱の火の吹き消された状態を言う。寂滅、悟りの境地。

# 永嘉大師證道歌 十二

くろうしゃくしくち ひん しょう  
窮釋子口に貧と稱す、

じつ こ みひん どうひん  
實に是れ身貧にして道貧ならず。

ひん すなは みつね るかつ ひ  
貧なれば則ち身常に縷褐を被す、

どう どころ むげ ちん おさ  
道あれば心に無價の珍を藏む。

貧窮の佛弟子は口々に貧と言っている。まさに身なりは貧だけれど道に貧ではない。貧であれば身にいつもぼろきれをまとっていればよい。道があれば心の中に値をつけようもない宝をおさめているのである。

釋子 釋迦の弟子。  
縷褐 ぼろきれ。

# 永嘉大師證道歌 十三

むげ たからもち  
無價の珍は用ふれども盡くること無し、  
もの り えん おう つい おし  
物を利し縁に應じて終に怯まず。

さんしんし ちたいちゆう まじ  
三身四智體中に圓かなり、  
はちげろくつうしんち いん  
八解六通心地に印す。

もともと価値のないほんとうの宝物はいくら使っても尽きることはない。他に利益を与えても機縁に応じて惜しむことはない。三つ佛身も四つの佛の智慧ももともと体の中に満ちている。八つの解脱も六つの神通力も以前から心の中に記されているのだ。

三身 そのままの佛身である法身、因に報いて現れる報身、衆生の機縁に応じて現れる応身。

四智 眞実を照らす大圓鏡智、一切の平等を悟る平等性智、対象をよく観察する妙觀察智、衆生のためにする成所作智。

八解 さまざまの欲から解脱すること。

六通 身体を意のままに自由にする神足通、来世における運命を知る天眼通、聞こえない音を聴く天耳通、他人の心を知る他心通、他人の過去の運命を知る宿命通、涅槃の境地を悟る漏尽通。

# 永嘉大師證道歌 十四

じょうし いっけつ いっさいりょう  
上士は一決して一切了ず、

ちゆうげ たもん おお しん  
中下は多聞なれども多く信ぜず。

た みづか かいちゆう くえ と  
但だ自ら懷中に垢衣を解く、

たれ よ ほか むか しょうじん ほこ  
誰か能く外に向つて精進に誇らん。

すぐれた人は一度決着したらすべてを了解する。そうでもない人はよく話を聴くけれどもほとんど信じることがない。ただ自分自身のふところの中で垢にまみれた衣を脱げばよい。だれが人に対して一生懸命の修行を誇るといふのだろうか。

上士 すぐれた修行者。  
精進 専一に修行すること。

# 永嘉大師證道歌 十五

他の謗するに從す他の非するに任す、  
火を把つて天を焼く徒に自から疲る。

我聞いて恰も甘露を飲むが如し、  
銷融して頓に不思議に入る。

人が誹謗するなら誹謗するに任せておけばよい。それは火で天を焼くようなもので自分自身で徒勞に気づくだろう。私はその誹謗を聞いても甘露の水を飲むようなものである。誹謗などは消え去って思慮分別の及ばない境地に至る。

銷融 消えてなくなる。  
不思議 思慮分別の及ばないところ。

# 永嘉大師證道歌 十六

悪言あくごんは是れ功德くどくなりと觀かんずれば、

此れ即ち吾が善知識ぜんちしきと成る。

訕謗せんぼうに因よつて怨親おんしんを起おこさざれば、

何ぞ無生慈忍むじょうじにんの力を表ひようせん。

悪口も善行の結果なのだから私にとって良い指導となる。誹謗中傷によって怨みを持つ人には慈悲の心を起こさないとすれば、どうやってもともと持っている慈悲、忍従の力を發揮するといふのだろうか。

功德 良よいい行いいの報ほうい。  
善智識 すぐれた指導者。

訕謗 誹謗中傷。

怨親 怨親平等。怨憎を持つ人々に対しても親愛する人々に対しても差別することなく慈悲の念を持って接すること。

無生慈忍 無生はもともと持っているもの。慈忍は慈悲、忍従。

# 永嘉大師證道歌 十七

しゆう またつう せつ またつう  
宗も亦通じ説も亦通ず、

じょうええんみよう くう とどこほ  
定慧圓明にして空に滞らず。

た われいまひと たつりよう あら  
但だ吾今獨り達了するのみに非ず、

ごうしや しょぶつたいみなおな  
恆沙の諸佛體皆同じ。

本来のことにも通じ説法も本来のことに通じている。坐禅の力も智慧も備わり空などという思想などにはこだわらない。ただ私一人がいまそのことに達しているというのではなく、ガンジス川の砂ほども多い諸佛と言われる方々はみな私と同じである。

定慧 禅定と智慧。坐禅の力量と本当のことを見極める力量。  
圓明 備わっていること。

恆沙 恆河沙。ガンジス川の砂。数え切れないほど多いことのとたとえ。

# 永嘉大師證道歌 十八

獅子吼無畏の説、

ひやくじゆうこれ

き

み

のうれつ

百獸之を聞いて皆な腦裂す。

こうぞうほんば

い

しつきやく

香象奔破するも威を失却す、

てんりゆうしず

き

ごんえつ

しょう

天龍寂かに聽いて欣悅を生ず。

獅子が吼えるような何ものをも怖れない佛の説法は、すべての獣たちもそれを聞いてみな腦みそが張り裂けてしまう。象が踏みつぶそうとして暴れても佛の説法の前には威厳を失ってしまうが、天に住む龍は静かに聞いて喜びを感じる。

獅子吼

獅子が吼えるような佛の説法。

無畏

畏れるところのない。

欣悅

よろこび。

# 永嘉大師證道歌 十九

こうかい あそ さんせん わた  
江海に遊び山川を渉り、

し たず どう とむら さんぜん な  
師を尋ね道を訪ふて參禪を爲す。

そうけい みち にんごく  
曹谿の路を認得してより、

しょうじあひあづか りようち  
生死相關らざることを了知す。

大河大海を歩き回り山や川を渡り歩いて師を尋ね、道を求め禪に参じて来た。  
しかし六祖大鑑慧能禪師の佛道を知ってからは生死などたいしたことではない  
と解った。

曹谿

六祖大鑑慧能禪師は曹谿寶林寺を中心に法筵を開いた。

# 永嘉大師證道歌 廿

ぎょう またぜん ぎ またぜん  
行も亦禪、坐も亦禪、

ごもくどうじょうたいあんねん

語默動靜體安然。

たと ほうとう あ つね たんたん

縦ひ鋒刀に遇ふとも常に坦坦、

たとひどくやく またかんかん

假饒毒藥も亦間間。

行ずることも禪であり、坐することも禪である。語るときも黙するときも動いているときも静かにしているときもその姿は安らかだ。たとえ刀の切っ先を突きつけられても平気である。またたとえ毒薬を盛られても気にしない。

鋒刀 毒薬

鋒はほこさき、切っ先のこと。  
達磨大師は毒殺されたという説がある。

# 永嘉大師證道歌 廿一

わがしねんとうぶつ まみ  
我師然燈佛に見ゆることを得て、え

たごうかつ にんにくせん な  
多劫曾て忍辱仙と爲る。

いくたび しょう いくたび し  
幾回か生じ幾回か死す、

しょうじゆうゆう じょうしな  
生死悠々として定止無し。

釈尊が然燈佛に出会って成佛の予言を受けたように私も正師に出会うことができ、  
できて長い間真の修行をつとめてきた。その修行は死んでは生き返るようなこと  
とであったが、生も死も悠々と巡るものでありとどまることのないものなので  
ある。

然燈佛

釈迦が菩薩のときに然燈佛から成佛の予言を受けたと  
される。

多劫

劫は長い時間のこと。

忍辱仙

釈迦が菩薩としての修行をしていたときの名前。

定止

止まること。

# 永嘉大師證道歌 廿二

頓とんに無生むじょうを悟了ごりょうしてより、

諸もろの榮辱えいじよくに於て何ぞ憂喜ゆうきせむ。

深山しんざんに入り蘭若らんにやに住す、

岑崿しんきん幽邃ゆうすいたり長松ちやうしようの下もと。

本来のことに気づいてみれば、さまざまな人生の浮き沈みに一喜一憂するこ

となどもとまらないのだ。いまは深山に分け入り寺に住んでいる。ここは険し

い山々の奥深く物静かな古い大きな松の木の下である。

蘭若

寺院、精舎の異称。

岑崿

岑も崿も山の険しい様子。

幽邃

奥深くてもものしずかなこと。

# 永嘉大師證道歌 廿三

優遊ゆうゆうとして靜坐じようざす野僧やそうが家いえ、

闍寂げきせきたる安居あんごじつ實じつに瀟洒しょうしや。

覺かくすれば即すなわち了りようじて功こうを施ほどこさず、

一切いっさい有いう爲ほうの法おなと同じおなからず。

寺という私の家で氣樂きらくに靜じようかに坐ざしている。ひっそりと靜じようかな修行しゆぎやうはまことにさっぱりとして清せいらかである。悟ごつてみればすべてに決けつ着ちやくがついて何なにかに功こうをたてることもない。佛法ぶつぽうはこの世よの「何なにかをなさねばならぬ」という決けつまりごととは同じではないのだ。

野僧

出家者の一人称。

闍寂

闍あやは靜せいかということ。ひっそり靜せいか。

安居

寺での修行。

瀟洒

さっぱりと清せいらか。

有爲

作為さしごとのある。

# 永嘉大師證道歌 廿四

住相じゆうそうの布施ふせは生天しょうてんの福ふく、

猶なほ箭やを仰あおいで虚空こくうを射いるが如ごとし。

勢せいりきつりきつ盡つきぬれば箭やかえ還おつて墜おつ、

來生らいしようの不如意ふにょいを招まねき得えたり。

布施などの善行もそれに固執してはこの世での一時的な福に過ぎない。矢で上に向かつて虚空を射るようなものである。矢の勢いが尽きてしまえば矢はおちてしまうようにあの世での不如意を招いてしまう。

住相	とどまること。
布施	寺や僧に金銭や品物を施す善行。
生天	この世。
來生	あの世。

# 永嘉大師證道歌 廿五

いかで し む いじつそう もん  
争か似かん無爲實相の門、  
いっちようじきにゆうによらいち

一超直入如来地なるに。

た もと え すえ うれ なか  
但だ本を得て末を愁ふること莫れ、

じようるり ほうがつ ふく こと  
淨瑠璃に寶月を含むが如し。

もうすでに如来の境地にいるのだから手のつけようのないありのままのこの  
佛法にまさるものはない。ほんとうのことを手にしているのに末節のことを心  
配することはない。誰もが清らかな瑠璃の入れ物の中に宝の珠を持っているよ  
うなものである。

實相 眞実ありのままのすがた。

一超直入 回りをせず一足飛びにそのものの中に入ること。

淨瑠璃 清らかな瑠璃の入れ物。

寶月 宝の月（珠）。本来の自己。

# 永嘉大師證道歌 廿六

われ今此の如意珠を解す、  
じりりたついで

自利利他終に歇きず。

こうげつてら しょうふうふ

江月照し松風吹く、

えいや せいしょうなん しょうい

永夜の清宵何の所爲ぞ。

私は今この意の如くなる宝の珠のことを解った。それが自分の利益になるのか他人の利益になるとか議論しても始まらない。江上の月は煌々と照っているし松林の間を風が吹き抜けている。この長い夜の清らかな宵はいつたい何故に今ここにあるのか。(答えてみよ)。

如意珠 意の如くなる宝の珠。本来の自己。  
所爲 原因。

# 永嘉大師證道歌 廿七

ぶつしょう かいじゆしんち いん  
佛性の戒珠心地に印す、

む ろうんかたいしよう え

霧露雲霞體上の衣。

こうりゆう はつ かいこ しゃく

降龍の鉢、解虎の錫、

りょうこ きんかな れきれき

兩鉢の金環鳴って歴歴。

佛の珠は心に刻まれているし、霧も露も雲も霞も身につける衣服のようなものである。そして龍を引きずり下ろす鉢を持ち、猛虎をなだめる錫杖をつく。手に持つ兩鉢の金環はいつでも鳴り響いている。

兩鉢 密教で使う佛具の一種。  
歴歴 明白なこと。

# 永嘉大師證道歌 廿八

是れ形こ かたちを標ひょうして虚むなしく事持じじするにあらず、

によらい ほうじょうした しょうせき

如來の寶杖親しん もとしく蹤跡だんす。

眞しんをも求めず妄もうをも斷だんぜず、

にほうくう むそう りょうち

二法空にして無相なることを了知す。

それらの鉢や錫杖は形を見せるだけのために無駄に持っているのではない。

佛の宝の杖をそのままに受け継いでいるのである。眞実など求めない。妄想も断ち切ることはない。眞実も妄想ももともとどうでもよいものだということを知っているのである。

二法 二法では眞と妄。

# 永嘉大師證道歌 廿九

無相むそうは空くうなく不空ふくうもなし、

すなわ ここ によらい しんじつそう

即ち是れ如來の眞實相。

しんきようあきぢ かんが さわ な

心鏡明かに鑑みて碍り無し、

かくねん けいてつ しゃかい あまね

廓然として瑩徹して沙界に周し。

眞実の相も嘘の相もないということとはそこには空もなく、それでは不空かというとな空ということもない。そのことこそが佛の眞実の相なのである。私たちの心も顧みれば明かに何の嘘もない。からりとして佛の光がこの世界に行き渡っているのである。

廓然 からりと開けたさま。

瑩 玉の周囲に発散する光。

沙界 娑婆世界。この世。

# 永嘉大師證道歌 卅

ばんぞうしんらかげなか げん  
萬象森羅影中に現ず、

いっか えんこうないげ あら  
一顆の圓光内外に非ず。

かったつ くう いんが はら  
豁達の空は因果を撥う、

もうもうとうとう おうか まね  
莽莽蕩蕩として殃過を招く。

森羅万象はその佛の光の中に現れている。一つの光といってもその光の内だとか外だとかいうのではない。意味から離れた空は因果など吹き飛ばしてしま  
うが、ぼんやりしていると災禍を招いてしまう。

豁達 のびやかでものごとに拘泥しない心情。

莽莽 ひろびろとしたさま。

蕩蕩 心がゆったりしたさま。

殃過 災禍。

# 永嘉大師證道歌 卅一

有うを棄すて空くうに著つく病やまい亦また然しかり、

還かえつて溺できを避さけて火ひに投とうずるが如ごとし。

妄もう心しんを捨すて眞理しんりを取とる、

取捨しゆしやの心しんぎ巧偽ようぎと成なる。

意味から離れてすべては空だと考えてしまう、坐禪の病とはまさにそのようなことだ。水に溺れることから逃れて火に飛び込んでしまうようなものである。迷いの心を捨てて真理に走る、その取捨の心が巧みな偽りとなってしまうのだ。

妄心 迷妄の心。偽りの心。  
巧偽 巧みな偽り。

# 永嘉大師證道歌 廿二

學人がくにんりよう了しゆぎようせずして修行もちを用ふ、

眞まことに賊ぞくを認めて將もつて子ことすることをな成す。

法財ほうざいを損そんし功德くどくを滅めつすることは、

斯こゝの心意識しんいしきに由よらずと云いふこと莫なし。

是こゝを以もつて禪門ぜんもんは心しんを了りようきやく卻やくす、

頓とんに無生むしように入るいは知見ちけんの力ちからなり。

坐禅を学ぶ人はそういうことが解らなくて修行を用いてしまう。ほんとうに盗賊を自分の子供としているようなものである。ほんとうの宝物を失い、功德も失ってしまうのはこういう心の持ち方によるのである。

まさにいまここでもってほんとうの修行者は心に決着をつけるのだ。そこで本来の自己に気づくのは究極の知見のおかげである。

法財 佛教でいうほんとうの宝物。

功德 善いことをした報い。

無生 生でないということ。今この生（本来の自己）を言う。

知見 知見波羅蜜。究極最高の知見。

# 永嘉大師證道歌 卅三

だいじょうぶえけん と  
大丈夫慧劍を乗る、

はんじや ほんさきこんこう ほのお  
般若の鋒 金剛の焰。

た よ げどう しん くだ  
但だ能く外道の心を摧くのみに非ず、

はや かつ てんま たん ちつきやく  
早く曾て天魔の膽を落卻す。

立派な禅者は智慧の剣をもつ。その智慧の切っ先は金剛でできた炎のようである。それは佛教以外の教えを奉ずる者を回心させるだけではなく、天魔の肝をもたたき落とす。

大丈夫 大乘の根器を備える修行者。

慧劍 智慧の剣。

外道 佛教以外の教え。

天魔 釈尊成道の時、第六天の魔王が降伏した。佛を邪魔する者。

# 永嘉大師證道歌 廿四

ほうらい ふる ほっく う  
法雷を震ひ法鼓を撃ち、

じうん し かんろ そそ

慈雲を布き甘露を洒ぐ。

りゆうぞう しゆくとううるほ むへん

龍象の蹴踏潤ひ無邊、

さんじようごしょうみ せいご

三乗五性皆な醒悟す。

雷がとどろき、太鼓がとどろくような説法をして慈悲の雲を敷き甘露をそそぐ。巨象がけり合うような錬磨の修行はそのうるおい限りない。本来悟ることのできないような人もみな悟ってしまうのである。

龍象蹴踏 巨象同士のけり合い。越格の力量の修行者が参集して錬磨すること。

三乗 声聞乗、縁覚乗、菩薩乗。前二者は小乗のため悟れない。

五性 衆生がもともと備えている素質を5つに分類する。悟ることのできない素質もある。

# 永嘉大師證道歌 廿五

雪山の肥膩更に雜り無し、

純ら醍醐を出す我れ常に納む。

一性圓に一切の性に通じ、

一法徧く一切の法を含む。

雪山に生えるという肥膩草は他の草に交じることがない。その草を牛が食べれば純粹な醍醐になるが、釋尊も受けたというその醍醐、本来の佛法を常に味わっている。一つのこととが本当に解ればそれは一切のことに通じているし、一つのこととが一切のことを含んでいる。

雪山 ①ヒマラヤ山脈。②釈迦は前世で雪山童子として修行していたという伝説がある。

肥膩 ①雪山にある草の名。牛が食すれば醍醐を出す。②膩は脂肪。  
醍醐 乳を精製して造る濃厚美味な液体。釈迦が苦行を終えたとき村の娘スジャータの差し出した醍醐によって体力を回復し成道したと言われる。

# 永嘉大師證道歌 卅六

いちげつあまね いっさい みず げん

一月普く一切の水に現じ、

いっさい すいげついちげつ せつ

一切の水月一月に攝す。

しよぶつ ほっしんわがしよ

諸佛の法身我性に入り、

わ しよつかえ によらい がつ

我が性還つて如來と合す。

一つの月がすべての水面に映り、すべての水面の月は一つの月を映してい

るように、諸佛の教えが私と一つになり私と如来が一つになる。

# 永嘉大師證道歌 廿七

いっちぐそく いっさいち  
一地具足す一切地、

しき あら しん あら ぎようごう あら  
色に非ず心に非ず行業に非ず。

たんじえんじょう はちまん もん  
彈指圓成す八萬の門、

せつな めつきやく さんぎごう  
刹那に滅卻す三祇劫。

いまこの場はすべての場に通じている。目に見えるものこのことを言っていないのではないし、心の様子を言っているのでも行いについて言っているのではない。指を弾く一瞬のうちにすべての説法は完成している。そしてその一瞬に菩薩が佛になるまでの時間などどつくに過ぎ去ってしまうのだ。

八萬の門

八万四千の法門。八万四千の煩惱に対する説法がある。

三祇劫

三阿僧祇劫。阿僧祇は無数のこと。劫は時間の単位。菩薩が如來になるためにかかる時間。

# 永嘉大師證道歌 卅八

いっさい すうく すうく あら  
一切の數句は數句に非ず、

わ れいかく なん きょうしよう

吾が靈覺と何ぞ交渉せん。

そし

毀るべからず讚ほむべからず、

たいこくう ごと がいがん

體虚空の若く涯岸なし。

どんな言葉も言葉として役に立たない。私のほんとうのところとどうやって  
通じ合うというのだ。だから言葉などで誹るにしても誉めるにしてもどうなる  
ものではない。ほんとうのところは虚空のように意味などなく果てしないもの  
なのである。

靈覺

佛性。

# 永嘉大師證道歌 卅九

とうじよ はな つね たんねん  
當處を離れず常に湛然、

もと すなは し きみ み べ  
覓むれば即ち知る君が見る可からざることを。

と え す え  
取ることを得ず、捨つることを得ず、

ふ かとく うちしも え  
不可得の中只麼に得たり。

いまこの場所を離れることはないしいつも何ということはない。何かを求めてみればそんなことを求めるべきでないと言うことを君は知るだろう。(ほんとうのことは)獲得することもできないし、捨てることもできない。得ることはできないもののだが、ただこのままいまここにすでに得ているのである。

當處

この場所。

湛然

落ち着いて静かな様子。

只麼

ただそのまま。

# 永嘉大師證道歌 四十

もく ときせつ せつ ときもく  
黙の時説、説の時黙、

だいせもんひら ようそく

大施門開いて壅塞なし。

ひとあ われ なん しゅう げ と

人有り我に何の宗をか解すと問はば、

ほう い ま かはんいや ちから

報じて道はん摩訶般若の力と。

黙っていても（ほんとうのことを）いつも説いているのだし、（言葉を尽くして）説いているときには（ほんとうのことについて）黙っているとも言える。だからいまここに佛法の門は大きく開いていて塞いでいるものは何もない。そこに誰か来て私にどんな大事なことを解っているのかと問うならばその人に言うであろう。それは大いなる智慧の力だと。

大施門

諸佛が衆生のために佛法を説き施すこと。

壅塞

塞ぐもの。

摩訶般若

般若は佛の智慧のこと。摩訶は大きいということ。

# 永嘉大師證道歌 四十一

あるい ぜ あるい ひ ひとし  
或は是、或は非、人識らず、

ぎやくぎようじゆんぎようてん

はか

な

逆行 順行 天も測ること莫し。

われはや

かつ

たごう

へ

しゆ

吾早く曾て多劫を経て修す、

こ

なおざり

あいおうわく

是れ等閑に相誑惑するにあらず。

ある時には是といたり、ある時は非というが人間がそんなことを識るわけがない。逆だとか順だとか天人でさえ測ることはできない。私はかつて長い間修行をしてきた。これはいい加減に（師匠と弟子が）お互いに欺しあったと言うことではない。

誑惑

たぶらかし惑わすこと。

# 永嘉大師證道歌 四十二

ほうどう た しゅうし りつ  
法幢を建て宗旨を立す、

めいめい ふつちよくそうけいこ

明明たる佛勅曹谿是れなり。

だい かしょうはじめ とう った

第一の迦葉首に燈を傳う、

だいさいてん き

二十八代西天の記。

説法の間を設け大事なことを伝えていくという釈尊の明らかな勅令はまさに六祖の流れをくむ禪宗に受け継がれている。釈尊の第一の弟子迦葉が（拈華微笑の故事によって）はじめに法燈を伝えた。そしてインドでの二十八代の祖師の伝えた法統を、

法幢

説法の道場の標識。

曹谿

六祖の流れをくむ禪宗の系統。

迦葉

釈尊の弟子の一人。

# 永嘉大師證道歌 四十三

こうかい へ このど い  
江海を歴て此土に入る、

ぼだいだるま しょそ な

菩提達磨を初祖と爲す。

だい でんえてんか きこ

六代の傳衣天下に聞ゆ、

こうじん とくどうなん すう きわ

後人の得道何ぞ數を窮めん。

海、河を渡りこの中国に伝えてきた菩提達磨を中国での初祖としている。五祖が六祖に授けた伝衣の故事は天下に知れわたっている。その後道を得た人々は数限りない。

江海 達磨は海を渡ってきたとされる。

六代の傳衣 五祖が嗣法の印として六祖に衣鉢を授けた。

# 永嘉大師證道歌 四十四

眞しんをも立りつせず妄もうもとく本ほん空くうなり、

うむとも や ふくう くう

有う無む俱ともに遣やれば不ふ空くうも空くうなり。

くうもんもとじやく

二十にじゅうの空くう門もん元げん著しやくせず、

いつしやう によらいたいおのずか おな

一いつ性しやうの如に來らい體たい自じら同どうじ。

眞実など立てることもないし妄想などもとあるはずもない。有も無もともに捨て去れば空を否定することもない。二十種類もあるといわれる空の教えももともと知ったことではないが、ほんとうの如来のすがたはおのずから同じなのである。

空門

空を説く教え。

# 永嘉大師證道歌 四十五

心しんは是これ根こん、法ほうは是これ塵じん、

りようしゆなおきようじよう 法ほうは是これ塵じん、

兩種猶鏡上の痕の如し。

ごんくつ のぞ ひかりはじ

痕垢盡き除いて光初めて現げんず、

しんぼうなら ぼう しょうすなわ しん

心法雙べ亡じて性則ち眞なり。

心を認めれば心は根のようにはり、法を認めれば法はまるで塵のように邪魔者となる。心も法も鏡の表面のきずのようなものである。きずや汚れが無くなってこそ本当の光が映るように、心も法も二つとも無くなったときにほんとうのことがそこに現れる。

# 永嘉大師證道歌 四十六

あままつぼう あくじせい  
嗟末法の惡時世、

しゅじょうはくふく

ちようせい がた

衆生薄福にして調制し難し。

しょう

さ

とお

じゃけんふか

聖を去ること遠うして邪見深し、

まつよ

ほうよお

おんがいおお

魔強く法弱うして怨害多し。

それにしても今は末法といわれる悪い時世だ。人々には福がなくどうにもしようがない。釈尊の死後ずいぶん時間がたつて間違つた考えが横行している。佛教以外の教えが強く、それに対して佛教の教えは弱くなってしまつて誹謗中傷されることが多い。

末法

釈尊死後千年以降を末法の世という。仏の教えがすたれ、修行するものも教法のみが残る時期。

聖

釈迦牟尼佛。

# 永嘉大師證道歌 四十七

にょらいとんきょう もん と  
如來頓教の門を説くことを聞いて、

めつじょ かわら くだ うら  
滅除して瓦のごとく碎かしめざることを恨む。

さ しん あ わざわい み あ  
作は心に在り、殃は身に在り、

おんそ さら ひと とが もち  
怨訴して更に人を尤むることを須いざれ。

そんな誹謗中傷も釈尊の禪門を説いて瓦を砕くように取り除いてしまいたいものだがそれもなかなかできないものである。そのようなかたがたとして作爲という余計なことを心はしでかしてしまうし、身口意には貪瞋痴（むさぼり、怒り、ものを知らない）という禍がある。だから誹謗中傷する人を怨んで咎めてはならない。

頓教

段階を経ず直接悟りに到達する教え。 禪。 反対語 漸教。

# 永嘉大師證道歌 四十八

無間の業を招かざることを得んと欲せば、

如來の正法輪を謗すること莫れ。

梅檀林に雜樹無し、

鬱密深沈として獅子のみ住す。

境靜かに林間にして獨り自ら遊ぶ、

走獸飛禽皆な遠く去る。

無間地獄に墮ちて責苦を受けたくないのであれば、釋尊の説法を誹謗してはならない。

梅檀という香樹の林には雜木が育たないように、佛道を修行する者にはどうしようもない者はいない。修行者の僧林は鬱蒼として深く靜かで獅子のように優れた者だけが住んでいる。靜かな環境で林のごとくそれぞれがそれぞれの境地に遊んでいるのだ。走り回る獸も飛び回る鳥もその靜かさの中で遠く去っていつてしまう。

無間業

無間地獄に墮ちて間断ない責苦を受けること。

法輪

釈迦牟尼佛の教え。

梅檀

熱帯地方に産する香樹。

# 永嘉大師證道歌 四十九

獅子兒衆ししじしゅうしりへ後に隨ふ、したが

三歲さいにして便すなはち能く大よに哮吼おおいす。こうく

若もし是れ野干こ法王やかんほうおうを逐おふならば、

百千ようかいの妖怪みだも虚くちりに口ひらを開かん。

そして獅子の子供たちが獅子に随っている。その随っている姿は子供であるのに獅子が説法をする姿そのものである。もし修行の未熟な狐が獅子である法王を追い出そうとするならば、多くの妖怪でさえ見かねて待ったをかけるであろう。

野干 狐。修行の未熟な者。

# 永嘉大師證道歌 五十

えんとん おしへ にんじょうな  
圓頓の教は人情没し、

うたがひ けつ じき すべか あらそ  
疑 あつて決せずんば直に須らく争ふべし。

こ さんぞうにんが たくま  
是れ山僧人我を逞しうするにあらず、

しゆぎようおそ だんじよう きよう だ  
修行恐らくは斷常の坑に墮せんことを。

坐禅の教えには人情など差し挟む余地はない。疑いが残って決着しないのであればすぐに論争してみたらよいだろう。それは修行者が自身をたくましくするというのではなく、その修行は世界は滅するとか世界は不滅だとかいう論理の穴に落ち込んでしまうであろう。

圓頓 円のように欠けた所も余る所もない教えを即時に決着する。

斷常 斷見とは世界が死後に断滅するという見解。

常見とは世界も我が身も永劫に変わらないという見解。

# 永嘉大師證道歌 五十一

非ひも非ひならず是ぜも是ぜならず、

之これに差たがふこと毫釐ごうりもすれば失しつすること千里せんり。

是ぜなるときんば龍女りゆうによも頓とんに成佛じようぶつし、

非ひなるときんば善星ぜんせいも生きながら陷墜かんついす。

非といつても非ではない。是といつても是ではない。このことを毛筋ほどの差でも間違えば千里をも失ってしまうことになる。本来の自己に是であれば龍女の娘でさえすぐに成佛するが、本来の自己に非であれば釈尊の子の善星でさえ生きたまま地獄に堕ちてしまう。

龍女成佛 龍女の娘が法華經により八歳で成佛したという故事。

善星 釋尊の子とされるが佛教の悪口を言い地獄に堕ちたという。

# 永嘉大師證道歌 五十二

わ そうねん この がくもん つ  
吾れ早年より來かた學問を積み、  
またか しょう たづ きょうろん たづ  
亦曾つて疏を討ね經論を尋ぬ。  
みょうそう ふんべつ きゅう  
名相を分別して休することを知らず、  
かい い いさゝ かぞ ただ みづか こん  
海に入つて沙を算へて徒に自ら困す。

私は若い頃から佛教についての學問を積み、經文についての解釈や論議を調べてきた。言葉を様々に勘案し休むことなく追求してきた。いま考えてみると海に入つて砂粒を数えるようなもので、いたずらにひとり困惑していたのである。

疏 書籍の解釈。

名相 言葉による表現。

分別 おもんばかりのこと。

# 永嘉大師證道歌 五十三

かへ によらい ねんご かしやく  
卻つて如來に苦ろに呵責せらる、

た ちんぼう かぞ なに えき  
他の珍寶を數へて何の益かあると。

じゆうらいそうとう みだ ぎよう おぼ  
從來踏躑として虚りに行ずることを覺ふ、

たねんま ふうじん きやく  
多年枉げて風塵の客となる。

そのとき祖師に親切にも諭されたのであった。偽物の宝を数えてどんな得があるのだ、と。その言葉にいままではよろめきながらむやみに修行をしていただけであったことがわかった。長い間むなしく（佛道の修行ではなく）俗世間の価値観に引きまわされていたのである。

踏躑 疲れてよろめくこと。

枉げて 無駄に。むなしく。

風塵 俗世間のこと。

# 永嘉大師證道歌 五十四

種性しゆじやうじや邪あやまなれば錯ちげつて知解す、

如來圓頓にょらいえんとんの制せいに達たつせず。

二乘にじようは精進しやうじんにして道心どうしんなく、

外道げいどうは聰明そうめいにして智慧ちえなし。

おおもとのところが間違つていれば、誤解をしまい如來の本来の教えに達することはない。話を聞いて悟った者や何かのきっかけで悟った者は一生懸命精進するのだが、本当の道心はない。佛教以外の教えを奉ずる者は聡明であるかもしれないが本当の智慧はない。

二乗 声聞乘と縁覺乘。声を聞いて悟った者。縁に依って悟った者。

外道 佛教以外の教えを奉ずる者。

# 永嘉大師證道歌 五十五

またぐちまたしようがい  
亦愚癡亦小駭、

くうけんしじょう じつげ しよう  
空拳指上に實解を生ず。

ゆび しゅう つき な ま こう ほどこ  
指を執して月と爲す枉げて功を施す、

こんきようほっちゅうみだ ねっかい  
根境法中虚りに捏怪す。

愚かな者たちは言葉の上に解釈をしてしまう。言葉を月だとしてしまい無駄に功績を誇っているのだ。この世は眼耳鼻舌身意の六根が色声香味触法の六境にただ接しているだけなのにそこに（解釈という）怪しげな術を弄んでしまうのだ。

愚癡、小駭 愚か者。

空拳指上 言葉は月を指す指である。指を調べるのではなく月を見よ。

根境 六根（眼耳鼻舌身意）。六境（色声香味触法）。

捏怪 奇を好み怪しげな術を弄ぶこと。

# 永嘉大師證道歌 五十六

いっぼう み すなは によらい  
一法を見ざれば即ち如來、

まさ なづ かんじざい な え  
方に名けて觀自在と爲すことを得たり。

りよう すなは ごっしようほんらいくう  
了ずれば則ち業障本來空、

いま りよう かへ すべか しゆくさい つぐな  
未だ了ぜずんば還つて須らく宿債を償ふべし。

どんな法も立てることがなければそれが如来なのだ。まさに（觀世音菩薩のように）自在に觀ることができよう。悟りきれば過去の悪業ももともたないことがわかる。いまだにそのことが分からないのなら過去の悪業を一生懸命償いなさい。

觀自在 自在にものを觀ること。觀世音菩薩。

業障 過去の悪業のために今世の学道の障りとなるもの。

宿債 宿世の負債。過去世において犯した悪業の報い。

# 永嘉大師證道歌 五十七

飢えて王膳に逢ふとも喰ふこと能はずんば、

病んで醫王に遇ふとも争か瘡ゆることを得ん。

欲に在つて禪を行ずるは知見の力なり、

火中に蓮を生ず終に壞せず。

飢えて王の食卓についても食べることができなければ、病になったとき優れた医者、佛に会つても病が癒えないようなものである。欲のまっただ中であつて禅の修行をするのがほんとうの智慧の力である。それは火の中に蓮の花が咲くように希有のことではあるが、その修行は決して壊れることがない。

王膳 王の食膳。

医王 優れた医者。佛を譬える。

欲・・・ 維摩経佛道品「火中に蓮華を生ず、是れ希有なりと謂つべし。

欲に在りて禪を行ず、希有なること亦是くの如し」。



# 永嘉大師證道歌 五十九

にびくあ いんせつ おか  
二比丘有り姪殺を犯す、

はり けいこうさいけつ ま  
波離の螢光罪結を増す。

ゆいまだいしとん うたが のぞ  
維摩大士頓に疑ひを除く、

な かくじつ そうせつ しよう ごと  
猶ほ赫日の霜雪を銷するが如し。

またその昔二人の比丘が邪姪と殺生の罪を犯した。優波離尊者がその罪を追求したのだが、維摩居士に追求しては却って罪を増すと諭された。維摩居士が二人の比丘の解脱への心配を除いたことはまさに太陽が霜や雪をとかすようなものであった。

二比丘 邪姪と殺生の罪を犯した。

波離 佛弟子の優波離尊者。持戒第一とされ、二比丘の罪を追求する。

維摩大士 維摩は優波離尊者に対して罪を追求することは、罪を増すことになる<sup>と説く</sup>。

赫日 燃え上がるように赤い太陽。

# 永嘉大師證道歌 六十

ふしぎげだつ ちから  
不思議解脱の力、

みょうようごうしや きわま な

妙用恒沙また極り無し。

しじ くようあえ ろう じ

四事の供養敢て勞を辭せんや、

まんりよう おうごん ま しょうとく

萬兩の黄金も亦た銷得す。

(維摩居士の) 解脱の力は、数限りなく絶妙にはたらく。だから食べ物や衣、散華や焼香によつて(その力に対して) 勞を厭わず供養するのだ。(そこに意味や理解をこじつけなければ) たくさんの黄金のような価値もすぐに消え去つてしまふであらう。

不思議解脱 維摩經の中に説かれる教え。無礙自在の悟り。

妙用 得道の人の何物にもとらわれない絶妙のはたらき。

恒沙 恒河沙。ガンジス川の砂。無量数を示す。

四事 供養に用いる四種。飲食、衣服、散華、焼香。

供養 供物を供えて回向すること。

萬兩の黄金 「一切有無の諸法、一一の境上に於て、都て纖塵の取染なく、

亦た無取染に依住せず、亦た不依住の知解なければ、這箇の人

日に万兩の黄金を食すとも亦た能く銷得せん。」(百丈録)

# 永嘉大師證道歌 六十一

粉骨碎身も未だ酬ゆるに足らず、  
ふんこつさいしん いま むく た

一句了然として百億を超ゆ。  
いっくりようねん ひやくおく こ

法中の王最も高勝、  
ほつちゆう おうもつと こうしやう

河沙の如來同じく共に證す。  
がしや によらいおな とも しょう

粉骨碎身の努力もその（維摩居士の）力に報いるようなものではない。一句でこそ決着がつくのであり、百億の言葉をも超える。佛法の王が最も優れているのであり、無数の佛祖がみなともに証明している。

了然 言い尽くしていること。

# 永嘉大師證道歌 六十二

わ いまこ によいじゆ げ  
我れ今此の如意珠を解す、

こ しんじゆ みなそうおう  
之れを信受するものは皆相應ず。

りょうりょう み いちもつな  
了了として見るに一物無し、

またひと な またほとけ な  
亦人も無く亦佛も無し。

私はいまこの如意珠を自分のものにした。この如意珠を信じ受けるものはみなその人となる。決着してみればここには何物もない。人もまた佛でさえもここにはないのである。

如意珠 意の如くなる宝の珠。本来の自己。

# 永嘉大師證道歌 六十三

だいせんしゃかいちちゅう あわ  
大千沙界海中の漚、

いっさい けんしょう でん はら ごと  
一切の賢聖は電の拂ふが如し。

たとひてつりんちちようじよう めぐ  
假使鐵輪頂上に旋るも、

じようええんみよう つひ しつ  
定慧圓明にして終に失せず。

それら（人や佛）はこの世の海に浮かぶ泡のようなものでつかもうとすれば消えていくのである。賢人聖人と言われる人は雷がすべてを振り払うようにそれらを一瞬のうちに振り払う。たとえ鉄の輪が頭を締め付けていても本当のこ

とを見極める力を決して失うことはない。

沙界 娑婆世界。この世界のこと。

定慧 禅定と智慧。坐禅の力量と本当のことを見極める力量。

圓明 備わっていること。

# 永嘉大師證道歌 六十四

ひ ひやや べ つき あつ べ  
日は冷かなる可く月は熱かる可くとも、

しゅま しんせつ え あた  
衆魔も眞説を壊すること能はず。

ぞうがそうこう まん と すす  
象駕崢嶸として謾に途に進む、

たれ み どうろう よ てつ こば  
誰か見る螳螂の能く轍を拒むことを。

太陽が冷たくなろうがまた月が熱しようが、さまざまな魔物も本当のことを破壊することはできない。本物の人が乗る車は山が険しくともわけもなく進むが、かまきりのような小器量の者は祖師の通られた道に進むのを自分から拒絶してしまふものである。

象駕 象が引く車。尊貴の人の乗る車。

崢嶸 山などが高く険しい様子。

謾 そぞろ。わけもないこと。

螳螂 かまきり。小器量の者にたとえる。

# 永嘉大師證道歌 六十五

だいぞうとけい あそ  
大象兔徑に遊ばず、

だいがしやうせつ かかは

大悟小節に拘らず。

かんけん

も

そうそう

ぼう

なか

管見を將つて蒼蒼を謗すること莫れ、

いま りよう

われいまきみ

ため

けつ

未だ了ぜずんば吾今君が爲に決せん。

大きな象がうさぎの道で遊ばないように、大悟は細かいことを云々しないものである。狭い了見で蒼々としたこの世界を誹ってはならない。いまだにわからないのなら私があなたのために決着をつけてあげよう。

管見

狭小な知見。

## 永嘉玄覺大師

(ようかげんかくだいし ？・七一三)

中國において禪が盛んになるきっかけとなった六祖慧能禪師の弟子。六祖というのは中國に禪を傳えたと言われる達磨大師を初祖として六代目に當るということである。六祖の弟子には他に臨濟宗の祖となる南嶽懷讓禪師、南陽慧忠禪師、曹洞宗の祖となる青原行思禪師ら錚々たる祖師がおられる。

「證道歌」は三祖大師の「信心銘」と並んで最も重要な祖録としてひろく讀まれる。